

釣れ釣れなるままに

1997年思い出の釣行記 PART. 2

身長が体重が



鹿島釣狂

☆開催日	平成9年7月20日			
☆開催場所	歌別川～襟裳岬港			
☆入釣場所	東歌別			
☆釣果	アブラコ	476	mm	2
	アカハラ	270	mm	1
	ハゴトコ			2
	重量	367	0g	
☆成績	合計点数	1113	点	
	成績	身長優勝		
	持ち点	4	点	

上司や同僚に恵まれて

前々日、職場の上司に釣り大会の参加について打診する20日は「海の日」であり休日となっているが、上司に伺いを立てての参加である。私は上司に恵まれている。快く承諾してくれる。

早速、同じ職場の後輩に話すと自分も浦河にカンカイ釣りに行くという。彼はオールマイティの釣り師である。溪流のヤマメやイワナ釣り、石狩川での鯉やナマズ釣り、ヘラブナもやるという。もちろん海釣りにも目がない。普段私が忙しくしているものだから、彼が札幌にエサを買いに行くついでに私の分も用意してくれるとのことである。更に仕掛けも作ってくれるとの温かい申し出であったが、これはやはり自分でやらなければ・・・丁重にお断りする。

前日、仕事を20時に終え、釣り具店に直行する。電話で予約しておいたイカゴ80本、カツオ12本、市販のマキエ6kgを買い込み自宅に帰って夜遅くまでエサ作り、仕掛け作りに精を出す。

当日、夕方19時30分、カンカイもあるぞと思いイソメを買い込み、集合場所に向かう。「北海道のつり」「鹿島釣狂」の釣行記「釣れ釣れなるままに」がひとしきり話題になる。

釣り場でのマナー

東歌別に入釣予定。島氏が沖ノ島に行くという。下見も十分にしておいて、干潮時に渡る通り道も解っているとのこと。沖ノ島は1度入釣してみたいと考えていた所である。同行を願い出て快く連れて行ってくれることになる。しかし、東歌別の大アブラコも捨て難い。ポイントも何とか解りかけてきている。優柔不断な私を見かねて嵐氏が最近の沖の島での他の釣り会の釣果を教えてくれる。あまり芳しくないようである。アブラコは良いが嫁さんのカジカが釣れないと云うことである。せっかく快諾していただいた島氏には悪いが東歌別に決定する。

バス停の坂道を下った所にある舟揚場に荷物を下ろす。船上げ場の左に先客がいたので声をかけ右側に入る。荷物はそのままにして、周りの状況を偵察に伺う。船上げ場の右方向には3人、左方向には4人が入釣している。

船上げ場に戻り、打ち込む。すぐにアタリがあり、ハゴトコが上がる。次から次へと釣れてくるのはハゴトコのみ。4時頃ようやくアカハラ27cmが上がる。これで、嫁さんができたが少し小さい。

昆布取りの準備のため周りが慌ただしくなってきた。ご老人が近づき

「あんた、まわりきれいにしているね～」という。私は、三脚を立てたときにすぐゴミ袋に鉛をひとつ入れてぶら下げ、出たゴミは極力その場で片付けることにしている。

「そこに積んであるホンダワラの山も片付けて行ってよ～」今は仕掛けが絡むためここに積みせてもらっているが、ここを引き上げるときは、もちろんもう一度海にお帰り願うことになることを告げる。

ご婦人が近づき

「間もなくここをトラックが行き交い、あんた釣っている暇ね～ぞ～」早々にここは撤退することにする。

身長か、体重か？

5時頃、潮が引けてきたので、右方向に降りるか、左方向に降りるかに悩むが、左方向には潮待ちの釣り人が道具を手に持ち、少し頭を出した岩伝いに少しずつ前進して行くのが見える。やはり勝手知った右側に降りることにする。こちらも同じ状況だが少しは海底の状況が分かるのでほかの釣り人より先に出岬に出る可能性がある。しばらく潮待ちの状態で1本の竿を打ち込むが釣れてくるのはハゴトコばかりである。潮が若干引けてきたので先端に渡ることができるか様子を見に空で確かめる。最後の渡りに難儀しそうだが荷物をまとめているうちに渡れるようになるだろう。腰まであった海水が膝近くになり難無く6時頃待望の先端に上がる。

近投でカジカ(25cm)が上がる。アカハラ(27cm)と比べて嫁さんをどちらにするか悩むような大きさである。いつも思うことなのだが重さと長さどちらを選べばいいのだろう。

10点 = 1cm = 100g

身長2cmの違いがカジカの重量200gになるだろうか。なるはずがない。しかし、少し大物になるとどうだろう。身長40cmを越えるカジカになると1cmの違いが100gになることはあるだろう。基本的に長さは重さに勝っていると考えているのだが……。1点2点を争う勝負は何度も見てきている。長さには敏感だが重さの実感はない。あまり考え過ぎると釣り場に量りを持ち込まなくてはならない。

少しでも身長を

8時頃、近投した竿に良いアタリがある。早く取り込むべくホンダワラの林から強引に抜こうと竿を煽るとプツン。

8時半、1本針で遠投しておいた竿にまたもや竿尻を持ち上げる当たり。今度は慎重に昆布根を切る。途中、昆布根に刺さり込まれたがやはり慎重にやり取りを繰り返して、目の前の離れ岩前まで寄せる。大きな赤黒い背中が昆布の間から見える。いつもなら離れ岩の上を引きずって抜き上げるところだが、私の方から波間を飛び越えて離れ岩に乗り、ていねいに手を差し出す。私の手からはみ出そうなでっぴりと太ったアブラコのおなかである。大事に懐に抱えて釣り場に戻る。50cmに届こうかと思われるアブラコである。それまでの獲物は簡単にバツカンに投げ入れていたが、あわててフラシを取り出し、逃げ出さないように慎重に入れてすぐ後ろの溝につける。ついでに先程釣ったカジカも入れる。カジカは本当に生命力がある。2時間ぐらい経過しているのにフラシの中でバシャバシャとやる。すぐに同じところに投げ込む。またもや45cm程のアブラコが釣れる。その後はハゴトコのみで終わる。先程生かしておいたカジカは海にお帰り願ひ、アカハラとアブラコ2本、そして比較的でっぴりと太ったハゴトコを審査に出すべく選定する。

身長優勝に輝く

東歌別のバス停に戻ると、野幌釣り会、北の釣り会のメンバーが先に上がってバス待ちをしている。船上げ場前に入釣していた人物は北の釣り会の塩内氏であった。名前は「北海道のつり」誌上でよく存じている。釣果を聞かれ、アブラコはいいものが上がったが、嫁さんがアカハラで頼りないと、素直にそのまま申し上げたが、それはなかなか良い釣りをしたこと、皆嫁さんがいなく苦勞していること等話してくださった。遠くから私とアブラコとのやり取りを観察していたらしい。

審査の結果 私は1113点で4位入賞である。アブラコは47.6cmあり身長優勝を果たした。重量優勝はあの島氏である。遠いエリモまで何度も下見を繰り返した熱意があつた沖ノ島のアブラコも数少ないカジカも呼び込んだに違いない。おめでとうございます。ご愁傷様です。島氏の熱意にほだされた沖ノ島のアブラコ様とカジカ様にご冥福をお祈り申し上げます。

